

論文の内容の要旨

論文題目

現代中国語における証拠性

——情報源表出形式の意味機能——

A Study on Evidentiality in Contemporary Chinese:

the Meanings of Information Source Expressions

氏 名 李 佳樑

証拠性 (evidentiality) とは、情報源 (情報の入手ルート) がどのようなものかということによって文の形を変える文法範疇のことである。1980年代の半ば以降、それまで専らネイティブ・アメリカン言語だけが対象であった証拠性に関する研究は、世界中の言語を数多く取り上げ、徐々に盛んになってきた。一方、文法範疇としての証拠性を持つ言語が世界の言語の約 25%を占めているにも関わらず、これまでたくさんの研究が蓄積されてきたメジャーな言語の中で、典型的な文法範疇という意味での証拠性が存在すると思われる言語は決して多くない。

中国語は孤立語であるため、狭義的な証拠素 (evidential) の存在を基準にしてみれば、「中国語には証拠性がない」のはごく自然な帰結となる。そのため、証拠性という概念を導入し中国語の事例を分析しようとする研究は見られるものの、中国語における情報源の表出にまつわる、より全般的な枠組みについては深入りされておらず、考察の余地がかなり残されている。また、事例研究においても、「これは情報源を表すものだ」という記述に留まってしまいう「ラベル貼り」式のもの少なくなく、証拠性についての通言語的な研究成果が中国語学に十分に反映されているとは言い難い。

そこで、本研究は「中国語における情報源の表出」を中心的なテーマとして、①中国語には証拠素、もしくはそれに近いものはないか、②中国語の母語話者は何を手がかりにして情報源を理解するのか、といった問いを念頭に置き、中国語の言語事実を合理的に説明できる情報源

の表出に関する枠組みを探る。その上で、事例研究として、一部の構文・機能語の成立のメカニズムを情報源の表出の視点から解明する。

本研究は9つの章から構成される。問題提起の第1章に続き、第2章では証拠性に関する先行研究の概観を行い、一般言語学の立場から証拠性の枠組みを提案した先駆的な論考と、証拠性の概念を用いて中国語の事例を考察・分析した事例研究をレビューした。その上で、中国語を対象にした証拠性の研究には

- ① 「情報源」と「情報源の信憑性」と「情報の信憑性」の混同。
- ② カテゴリとしての「証拠性」という意味において表出される情報源を認定する基準の不確かさ。

という二つの最大の問題点が存在していることを指摘した。このような背景の中で、本研究は第3章の前半で、証拠性の理論的枠組について次のような整理をした。

- ③ 特定の情報源を意味する形式と、特定の情報源に由来している情報を要求する形式を合わせて「情報源表出形式」とした上で、「証拠素」・「証拠構造」・「証拠策」と3つに分類した。その中で、「証拠素」の認定範囲を minor category に属す副詞まで広げることとした。
- ④ ある言語に存在する文法範疇としての証拠性の有無は、証拠素の有無によって決まる。また、証拠素があると認められた場合は、その証拠性システム——いくつ選択肢を有するシステムなのかなど——も存在している証拠素によって決められる。

以上の枠組みを確定した上で、第3章の後半で中国語（共通語）において情報源表出形式を見出すための考察を行った。考察の結果としては中国語に関して、次のことが確認された。

- ⑤ 証拠構造は主に動詞句によって構成されている。実証的情報源は感覚動詞から、推論的情報源は思考動詞から、伝聞的情報源は伝達動詞からなるのが一般的である。
- ⑥ 情報源を第一義とし、minor category に属するという「証拠素」の認定基準に合致する形式には“说是”と“想是”の二つがあり、それぞれ情報源の〈伝聞〉と〈推論〉に対応している。ところが、“说是”と比べると“想是”のほうにはジャンル・スタイルの特異性が見られ、共時的に“说是”と同一視しないほうが妥当であると思われる。
- ⑦ 実証的情報源と推論的情報源には、証拠策が複数存在していることが認められる。程度副詞の選択・持続的アスペクトの表出・描写性／臨場感の向上は、性質・属性に関する実証的情報源の表出につながっている。一方、「危惧」・必然性／蓋然性に関する認識的モダリティの形式は推論的情報源に由来している情報を要求する。
- ⑧ これらの情報源表出形式の実態を踏まえて、共時的な観点から見れば中国語（共通語）に存在する証拠素は“说是”のみである。したがって中国語においては“说是”が表す〈伝聞〉だけが比較対照的に文法的に表出され、そのことから中国語は2選択——〈伝

聞)であるか(その他)であるか——の証拠性システムを持つ言語であると見なせる。

第4章では証拠素の“说是”を取り上げ、伝達動詞が(伝聞)の証拠素へ変容する過程を明らかにすることを試みた。この過程においては、二つの先決条件を特筆すべきである。つまり、意味的に発信者指向から受信者指向に移行することと、文法的に動詞から脱範疇化することである。証拠構造に留まっている伝達動詞はこの二つの条件の何れかを満たしていないのである。ところで、文法的に情報源を表出する形式であり、意味的に希薄化が起きていることから、用いられる情報が(伝聞)のみならず、話し手からの修正・補足説明を行うような逆接的な後続文脈があれば、という条件付きで(直接経験)の情報にも“说是”が付けられる。(直接経験)から知り得たはずの情報をあえて、最も共有しやすい情報源である(伝聞)として伝達することから、この「伝聞」の内容と異なる情報を話し手が把握していることを連想させる効果がある。そこから(伝聞)と話し手からの修正・補足説明がつながってくる。

第5章以降は事例を取り上げ、一部の機能語・構文の成立が情報源の表出に動機づけられていることを論じた。第5章と第6章は、中国語の方言である呉語に属する上海語と閩語に属する台湾語における(伝聞)を表す形式の派生義について、情報源の表出に関連付けて変容の過程を分析した。第5章と第6章で提示した方言の事実から見ても、(伝聞)の証拠素の派生用法あるいは意味機能の拡張は、最初は(直接経験)との共起から始まることが分かる。上海語の“伊讲”は(直接経験)に由来している情報を表す文の文末に現れ、話し手側の意外性を表す形式になった。また、平叙文・命令文・疑問文の文末に用いられる台湾語の“讲”は聞き手が情報を知った瞬間に感じるはずの意外性を想定し、聞き手に「注意喚起」を促す。“讲”が共起する平叙文・命令文・疑問文はいずれも話し手の(直接経験)を経て確認済みの情報を表したり、含意したりしている。

(伝聞)のみならず、(推論)の情報源表出形式が(直接経験)の情報に用いられた場合も、ほんらいの(推論)という情報源を表出する機能から逸脱する。第7章ではこのような事例を取り上げた。上海語の“勑”は制止を表す否定副詞から、「危惧-認識のモダリティ」の段階を経て蓋然性を表す認識的モダリティの形式になっており、(推論)の情報源を含意する。その“勑”の直後に(直接経験)の情報を要求する“太~噢”が生起すると、推論の意味が抑えられ、「感嘆」という強意の訴えかけの構文となる。

“伊讲”、“讲”、“勑太~噢”の事例から、中国語における証拠素をはじめとする情報源表出形式の意味機能の拡張は、(直接経験)に用いられることを要因として、対人的機能へシフトする傾向にあると結論づけられる。これは、第4章で議論した、伝聞的情報源と推論的情報源のほうが聞き手からも比較的共有しやすいということと密接な関係があると考えられる。話し手が聞き手に共有しやすい情報源を添付することによって、聞き手に情報確認の要請をしているわけである。つまり、(伝聞)・(推論)の情報源表出形式を付加すると、情報源の表出とと

もに、「聞き手が情報入手・形成へ積極的に参加してほしい」という合図も出されると考えられ、そこが〈聞き手目当てのモダリティ〉に繋がるのである。

我々は他者の感情・感覚など内在する状態を〈直接経験〉によっては知り得ない。しかしながら、他者に内在する状態へ言及する場合は、〈直接経験〉で了解可能な自分に内在する状態と同じ形式で表出することもあれば、異なる形式を取ることもある。第8章は他者に内在する状態への言及に焦点を当て、その言及における情報源の表出の有無を考察した。調査した結果に基づいて、中国語は多くの場合に内在的状态の主体を問わずに同様の無標の形式で表出するが、一方で情報源を特定化するような形式・ストラテジーもいくつか見られることが判明した。その場合、表出される情報源は（話し手自らの体験ではなく、五感による）〈知覚〉と〈推論〉である。内在的状态の主体が自分以外の他者であることをより明白にするのが、これらの形式・ストラテジーを用いる一つのモチベーションである。また、とりわけ情報形成への話し手の参加を最小限にすることによって、情報の真実らしさについての話し手の責任の矮小化を図り、〈推論〉の情報源を意図的に表出することが考えられる。そこから伝達される内在的状态に対して、話し手の断定保留ないし否定的態度が読み取れる。

第9章では、各章の主な結論をまとめ、更なる一般化を行った上で、今後の課題を提示した。

本研究を通じて、証拠性は中国語の具体的な現象を分析する際に有効であること、またこれからの証拠性の研究は中国語をもっと視野に入れるべきであることを主張した。